

うちの猫にはシャム猫の血が入っているらしい

小倉高校 2 年 古森 果歩

タイ料理のレストランに行った。入り口にある見たことのない置物が少し入るのをためらわせたが、中で聞こえるタイの民族的な音楽や店内のテレビに映る、悠々と歩くゾウとタイの街並みに引き込まれた。

もともと、私のタイへの思いは並々ならぬものだった。その理由のひとつは、6 年間タイで暮らしたことのある友達の存在だ。中学生のとき彼女に出会ってから私のタイへの興味は高まりつづけている。タイで外食するときは屋台に行っていたという話、夏休みにマングローブの木を植えに行ったという話、ずっと日本で暮らしている私にとって日本とは違う環境や文化の話はとても新鮮で、「私も行ってみたい！」と思うようになった。

ちょうどその頃、好きなアーティストがタイの音楽イベントに参加したことも、私のタイへの思いを強くした。メンバーや現地の方がタイ語で話しているのを聞いて、内容は全くわからなかったけれど、とても明るい気持ちになった。それは、例えば文章の最後が a の母音で終わることが多かったり、促音が多く含まれたりなどの、タイ語の特徴ゆえ受け取られる感覚なのだろう。

そして、タイの開放感は、街並みを見るとよりはっきりと分かる。建物から屋台の屋根、乗り物までが色彩豊かで、眺めているだけで、非日常感を味わえる。気分が重い時も、あの道を通ると気持ちが晴れそうな気さえる。

そしてその時から、私にはトゥクトゥクに乗りたいという夢がある。トゥクトゥクとは東南アジアの国々でよく乗られている、明るい色合いが南国らしい三輪タクシーだ。窓がないため開放的で、色彩豊かなタイの街並みを存分に楽しめる。実はそのルーツが日本にあるということを知り、親近感まで持ち始めている。

親近感といえば、実際にそのレストランで食べた料理は、初めて味わうものだったにもかかわらず、なんだか親しみがあるような気がした。

一緒に行った母とも、店内の音楽を聴いて、「日本の演歌とか中華のお店で聞こえる音楽とかと同じで、タイにもゆったりのテンポの伝統的な音楽があるんだね。」という話をした。同じアジアの国だからなのか、異文化のものといっても、まったく違う、知らないものではないんだなと感じた。

壁にかかっていた民族衣装の写真を見ながら、タイ料理を存分に楽しみ、店員さんの「コップンカー！」という朗らかな挨拶を聞いて、私と母は、まるでタイで小旅行をしたような気分になり、大満足で店を後にした。

異文化との出会いは、実は、毎週訪れる。高 1 の時担任の先生に勧められた英字新聞だ。

猛暑のスペインのパンダの暮らしやマサチューセッツ州のカップルに起きた事件なんてなかなか知り得ないことなので、時事的な英単語に慣れる目的で読み始めたこの新聞だが、今では毎週末の楽しみのひとつになっている。

行ったことのない国のニュースを読むと、その国を知る切り口が見えたような気がする。気になったときには、その国の人は、どんな服を着て、何を食べて過ごしているんだろう。と想像したり、調べてみたりする。

最近でいうと、ベルギーのフライドポテトの値段が上昇しているという記事が印象的だった。恥ずかしながら、ベルギーといえばチョコレートというイメージばかり持っていた。しかし、調べてみてフレンチフライの発祥がベルギーだという、私にとっては意外な事実を知り、とても驚いた。それと同時に、ベルギーという国を、以前よりも近くに感じるようになった。

知らない文化を知ることはワクワクする。そして、そこに自分とのつながりを見つけられるとなんだかすごく嬉しい。昨日まで遠くに感じていた、生活を想像したこともなかった国にグッと近づく気がする。知らなかった文化について興味を持ち、知ろうとすること、それが異文化理解への第一歩なのだと私は思う。

このエッセイを書きながら、私のタイに行きたい気持ちは一層強いものになっている。

いつか、実際にタイに行って、現地でしか感じられない魅力に迫って、タイという国をもっと身近に感じるのが楽しみだ。